7/9 朝日

黙って針仕事した特攻の母

無職　（兵庫県　84）

「尾道の上空　特攻隊員の笑顔」（6月22日）を読み、驚いた。特攻隊の多田良（たたら）政行少尉が1945年、故郷に空から別れを告げた前夜、私は少尉の母と妹と一緒だった。

少尉の妹は幼稚園からの私の親友。特攻隊に入った兄が大好きで自慢の種だった。その夜、14歳だった私は彼女の家で数学を教えてもらっていた。灯火管制で薄暗い電灯の下、お母さんは針仕事をしていた。当時には珍しく電話のあった隣家の人が「電話だよ」と告げにきた。親子は隣に行き、しばらくして親友が戻った。「お兄ちゃんじゃった。明後日出陣するんじゃって。『兄ちゃん轟沈（ごうちん）よ』言ったら、『まかしとけ』言うとった」。お母さんも戻り、縫い物を続けた。無言だった。「轟沈　轟沈」と大声で軍歌を歌う親友の頬には涙が光っていた。

翌日も私は親友と一緒だった。戦闘機が尾道上空を低く旋回し、消えていった。親友は「お兄ちゃんじゃん。轟沈よ、きっとよ」といつまでも手を振っていた。

今でも黙々と針仕事をしていたお母さんの姿が忘れられない。そして40代で逝った親友を思いながら、戦争だけは絶対やらんよ、あの道に二度と帰らないよと誓う。